元曲公案劇の構成
――釈冤への手続き――

村上公一

はじめに

前稿に引き続き、冤罪事件を中心テーマとする八作品を取り上げ、元曲公案劇の類型化について考える。本稿では釈冤への手続きについて見ていくことにする。(注一)

題材とする作品は以下の通り

―旦本―（女主役本）五篇

①―救孝子賢母不認屍―（元曲選本）

②―包待制知賺灰闌記―（元曲選本）

③―感天動地竇娥冤―（元曲選本・古名家雑劇本・酔江集本）

④―錢大尹智勘緋衣夢―（脈望館鈔本・古名家雑劇本・顧曲斎本）

⑤―清廉官長勘金環―（脈望館鈔本）

―末本―（男主役本）三篇

⑥―神奴児大鬧開封府―（元曲選本）

⑦「河南府張鼎勘頭巾」（元曲選本・古名家雑劇本）

⑧「張孔目知勘魔合羅」（元曲選本・元刊本・古名家雑劇本・酔江集本）(注二)

一

無実の罪を自白し死囚牢で死を待つ被告達の前に、清廉明察なる裁判官が登場し、事件は解決に向かって進み始める。「魔合羅」では次のように始まる。

「外扮府尹引張千上」［詩云］濫官肥馬紫絲韁、猾吏春衫簌地長、稼穡不知誰壞却、可教風雨損農桑。老夫完顔女直人氏。完顔者姓王、普察姓李。老夫自幼讀書、後來習武。爲俺祖父多有功勛、因

此上子孫累輩承襲、爲官爲將。這河南府官濁吏弊、往往陷害良民。聖人親筆點差老夫爲府尹、因老夫除邪秉正、勅賜勢劍金牌、先斬後奏。老夫上任三個日頭、今日陞廳、坐起早衙。怎生不見掌案當該司吏。

―外、府尹に扮し、張千を引き連れて登場― ［詩せりふ―欲張り官人の肥った馬は紫絹の手綱、小狡い吏人の晴れ着は地面に届くほど長い、農事は一体誰が駄目にするのか、雨風が農事を損なうのか。それがしは完顔氏、女直の者。完顔の姓は王、普察の姓は李。それがし幼少より書を読み、後に武芸を習う。祖父に勲功多きが故に、子孫は代々官職を受け継ぎ、文官、武将となる。ここ河南府は官吏が汚濁し、常々良民を陥れている。そこで陛下ご自身が直々にそれがしを府尹に任命なされた。それがしが不正を取り除くため、勢劍と金牌を賜り、悪人を切り捨てる許しを下さった。それがし着任して三日目、本日は登庁して朝の務めをいたす。文書係の担当役人は何故来ていないのだ。

供回りのもの張千を引き連れて登場する官人は、正末が官人包拯に扮する―神奴児―を除き、全て上場詩を詠む。[15] この上場詩はそれぞれの作品によって全く異なる。例えば「竇娥冤」の竇天章は以下のような詩を詠む。

獨立空堂思黯然、高峯月出滿林烟、非關有事人難睡、自是驚魂夜不眠。

ひとりで誰もいない部屋に佇むと、暗い気持ちになって来る。高い峰に月が出ているが、林はもやに覆われている。人を眠れなくさせる何事があるわけではない。心が落ちつかず夜も眠れないのだ。

ここには行方知れずの娘に対する竇天章の思いが詠まれている。このように、それぞれの官人の置かれた状況に合わせて、それぞれ異なった詩が詠まれる。この点、全ての官人がほぼ同じ上場詩を詠む前段（冤罪の場）とは大きく異なっている。

上場詩のあとで自己紹介がなされるが、こちらは類型化がみられる。以下の三点がほぼ全作品に共通する。

一、府尹（開封府か河南府）か提刑肅政廉訪使の職にある。

二、勢劍金牌を持ち、先斬後奏が許されている。

三、赴任したばかりか当地での任務についたばかりで

ある。

◎「救孝子」　官人王翛然

老夫大興府尹王翛然、自邊軍回來、累加官職、賜與我勢劍金牌、先斬後奏、專一體察濫官汚吏、採訪孝子順孫。

今日來到這河南府審囚刷卷。

◎「灰闌記」　官人包拯

官拜龍圖待制天章閣學士、正授南衙開封府府尹之職、勅賜勢劍金牌、體察濫官汚吏、與百姓伸寃理枉容老夫先斬後奏。

（今有包待制西延邊賞軍、差着我去迎接回來）(注四)

◎「寶娥寃」　官人竇天章

加老夫兩淮提刑肅政廉訪使之職、隨處審囚刷卷、體察濫官汚吏、容老夫先斬後奏。老夫一喜一悲、喜呵、老夫身居臺省、職掌刑名、勢劍金牌、威權萬里。

今日來到這淮南地面。

◎「緋衣夢」　官人錢可

今御筆親除開封府府尹之職。

（如今新官下馬、如之奈何）(注五)

◎「勘金環」　官人孫榮

加小官爲天下提刑肅政廉訪使之職、着小官遍天下審囚刷卷、勅賜與勢劍金牌、着我先斬後奏。

今到這開封府也。

◎「神奴兒」　官人包拯

西延邊賞軍回來。

◎「勘頭巾」　官人完顏

今爲河南府尹。此處官濁吏弊、人民頑鹵。御賜我勢劍金牌、先斬後奏、差某往此審囚刷卷、便宜行事、專一體察濫官汚吏、禁治頑魯愚民。

早已赴任三日也。

「灰闌記」の包拯、「緋衣夢」の錢可、「勘頭巾」「魔合羅」の完顏が府尹、「寶娥寃」の竇天章、「勘金環」の孫策が提刑肅政廉訪使の職に就いている。「救孝子」の王翛然は、大興府尹から何に昇進したのか具体的に述べられていないが、職務は河南府で行われており、上記二種のうちのいずれかであろう。「神奴児」の包拯には、自己紹介の中に「開封府尹」と、「勢劍金牌、先斬後奏」についての記述がないが、包拯のこの二点については当時の観衆にとっては当たり前のことであり、既にそれらを登場人物に語らせる必要がなくなっていたのかもしれない。

これらの官人が職務を行うのは、「竇娥冤」を除き、全てが開封府か河南府である。元曲では物語の舞台が北方に偏る傾向があるが、これらの作品では開封府と河南府の二カ所に絞られている。

二

新たな官人の登場により、事件は解決に向けて一気に進んでいくように見える。しかし、続く場面はこの流れに水を差すようなやり取りになっている。

「張千云」當該司吏大人呼喚。
「令史上云」來了來了。「見科」
「府尹云」你是司吏。
「令史云」小的是。
「府尹云」兀那廝、你聽者。聖人爲你這河南府官濁吏弊、勅賜老夫勢劍金牌、先斬後奏。若你那文卷有半點差錯、着勢劍金牌、先斬你那驢頭。有合僉押的文書、拏來我僉押。
「令史云」有有有。就把這一宗文卷大人看。
「府尹看科云」這是那一起。
「令史云」這是劉玉娘藥死親夫。招狀是實。則要大人判個斬字。
「府尹云」劉玉娘因姦藥死丈夫、這是犯十惡的罪。爲何前官手裏不就結絶了。
「令史云」則等大人到來。
「府尹云」待報的囚人在那裏。
「令史云」是在死囚牢中。
「府尹云」取來。我再審問。
「令史云」張千、去牢中提出劉玉娘來。
「張千云」理會的。
「旦上、云」哥哥、喚我做甚麼。
「張千云」你見大人去。
「令史云」兀那婦人、如今新官到任問你、休説甚麼。若胡説了、我就打死你。張千、押上廳去。
「張千云」犯婦當面。「旦跪科」
「府尹云」則這個是那待報的女囚。
「令史云」則他便是。
「府尹云」兀那女囚、你是劉玉娘、你怎生因姦藥死丈夫。恐怕前官枉錯了。你有不盡的言詞、從實説來。我與你做主咱。
「旦云」小婦人無有詞因。
「府尹云」既他囚人口裏無有詞因、則管問他怎麼。將筆來、我判個斬字。押出市曹、殺壞了者。「張

千押旦出科」
「旦云「天也、誰人與我做主也呵。
「張千せりふ」担当役人、府尹殿がお呼びだ。
「令史登場、せりふ「参りました。参りました。
「面会のしぐさ「
「府尹せりふ」お前が担当役人か。
「令史せりふ」さようでございます。
「府尹せりふ」おいお前、よく聞け。陛下はお前たち河南府の官吏が汚濁しているので、それがしに勢剣金牌を賜り、悪人を切り捨てる許しを下さった。もしお前の書類にわずかでも間違いがあったら、勢剣金牌によって即刻お前の頭を叩き斬ってやる。決裁の必要な書類があったら、決裁するから持って来い。
「令史せりふ「ございます。ございます。では、こちらの文書をご覧下さい。
「府尹見るしぐさ、せりふ「これはどの一件だ。
「令史せりふ」これは劉玉娘が夫を毒殺した一件でございます。供述調書に間違いはありません。府尹殿に「斬」の判決をお書きいただくだけでございます。
「府尹せりふ」劉玉娘が姦通により夫を毒殺したのであれば、これは十悪の罪を犯したことになる。何故前任府尹の手で始末をつけなかったのだ。
「令史せりふ」ただ府尹殿の御着任をお待ちしておりました。
「府尹せりふ」判決を待ちの囚人はどこにいる。
「令史せりふ」ただいま死囚牢に入れてあります。
「府尹せりふ「連れて来い。わしがもう一度取り調べをする。
「令史せりふ」張千、牢屋に行って劉玉娘を出してこい。
「張千せりふ」かしこまりました。
「旦登場、せりふ「お兄さん、私を呼んで何をなさるの。
「張千せりふ」お前は府尹殿にお会いするのじゃ。
「令史せりふ」そこの女、新しいお役人が御着任になり、お前をお調べになるが、何も喋ってはならぬぞ。もしいい加減なことを喋ったら打ち殺してやるからな。張千、府尹殿の所に連れて行け。
「張千せりふ」女囚、府尹殿のお前だ。「旦跪くしぐさ」
「府尹せりふ」こいつがあの判決待ちの女囚か。
「令史せりふ」さようでございます。

「府尹せりふ」そこの女囚、お前は劉玉娘だな。どうして姦通により夫を毒殺したのだ。前任官の誤審ではないかな。申し開きの足りぬ点があれば、包まず申してみよ。わしが助けになってやろう。

「旦せりふ」私は何も申し立てることはございません。

「府尹せりふ」囚人に申し立てることがなければ、いくら取り調べても仕方あるまい。筆を持って参れ、「斬」の判決を書く。刑場に護送して処刑せよ。「張千、旦を護送して出るしぐさ」

「旦せりふ」神様、誰にすがったらいいの。

官人は当該の令史を呼び、処理すべき案件があるかどうかを尋ね、劉玉娘の一件が再度取り調べられることになるのだが、令史の脅しにより劉玉娘は申し開きをしない。そこで府尹は「斬」の判決を下す。これでは状況は〈冤罪の場〉と変わりが無い。この場面の最後に被告の口から発せられる言葉「天也、誰人與我做主也呵（神様、誰にすがったらいいの）」は〈冤罪の場〉で被告が発した言葉と全く同じである。本格的な再審は次の六案都孔目張鼎の登場を待たなければならない。[注5]

官人の登場と本格的な再審の開始との間に置かれたこの一段―仮に〈停頓の場〉ということにする―は他の作品にも見え、細部にわたりかなり類型化している。整理すると次のようになる。

一、官人が令史を呼ぶ。
二、官人が令史を脅す、または令史が官人を恐れる様子を示す。
三、官人が令史に処理すべき案件の有無を尋ねる。
四、令史が書類を差し出し、概要を説明する。
五、官人が被告一同を連れて来させる。
六、令史が被告を脅す。
七、官人が被告を尋問する。
八、被告は申し開きをしない。
九、官人は前任者の判決を追認する。

同一の形式をとるものは他に「勘頭巾」「緋衣夢」（二・六を欠く）「勘金環」（九を欠く）がある。また「救孝子」では六以下が次のようになっている。

（「王翛然云」）兀那小廝、你有甚麼不盡的詞因、我根前伸訴。我與你做主。

「謝祖云」小的毎西軍莊人氏。

「令史打攙云」西軍莊人氏。哥哥楊興祖、兄弟楊

謝祖。哥哥當軍去了、他調戯他嫂嫂不肯、他殺了他嫂嫂也。
一王翛然云一誰問你來。兀那小廝、你説。
一楊謝祖云一西軍莊人氏。
一令史云一西軍莊人氏。
一王翛然云一張千、採下去、着他口中啣着板子、弔下來便打。兀那小廝、你説。
一楊謝祖云一小人是西軍莊人氏。［令史又攙科］
一王翛然云一張千與我打這廝者。［打令史重啣板子科］
（「王翛然せりふ」）そこの小者、申し開きの足りぬ点があれば、わしの前で申してみよ。わしが助けになってやろう。
一謝祖せりふ一私は西軍莊の者です。
一令史邪魔をするせりふ一西軍莊の者、兄楊興祖、弟楊謝祖。兄が従軍に出ると、こいつは兄嫁にちょっかいを出し、兄嫁が言うことを聞かなかったので、殺してしまった。
一王翛然せりふ一誰がその方に尋ねた。そこの小者、話してみろ。
一楊謝祖せりふ一西軍莊の者。
一令史せりふ一西軍莊の者。
一王翛然せりふ一張千、引っ張って行け。そいつの口に板をくわえさせ、もし板が下がったら打て。そこの小者、話してみろ。
「楊謝祖せりふ」私は西軍莊の者です。［令史また邪魔するしぐさ］
「王翛然せりふ」張千、わしに代わってそいつを打て。［令史を打ち、更に板をくわえさせるしぐさ］

ここでの令史は裏で被告を脅迫し官人の前で申し開きをしないようにするのではなく、官人が被告を尋問する邪魔をしている。先の六・七・八のやり取りの変形である。これにより事態が停頓しているのは言うまでもない。

「灰闌記」でも令史が官人の被告に対する尋問を邪魔することによる停頓が現れる。夫殺しの罪で開封府に護送されてきた被告に対する府尹包拯の尋問に際し、開封府で令史をしている被告の兄張林が全て横から口をはさんで答えてしまい、尋問が一向に進まないことになる。この場合悪意による停頓ではないが、やはり変形の一種と考えることができる。また「灰闌記」には一から五までのやり取りは無い。これは他の作品が

前任官の残した案件の処理を新任の官人が行う形でこの場面が作られているのに対し、「灰闌記」では下級官署から護送されてきた被告を取り調べる形を取っているという違いによる。

「竇娥寃」にも、これまで述べてきたものとは違った形ではあるが、新官登場から実質的な再審開始の間にこれらの作品と同じように〈停頓の場〉が挿まれている。

「竇天章云」我將這文卷看幾宗咱。「起犯人竇娥、將毒藥致死公公。我纔看頭一宗文卷、就與老夫同姓。這藥死公公的罪名犯在十惡不赦。俺同姓之人、也有不畏法度的。這是問結了的文書。不看他罷。我將這文卷壓在底下、別看一宗咱。」

「竇天章せりふ」さて、書類の幾つかに目を通そうか。一件、犯人竇娥、舅を毒殺する。最初の書類を見始めたところだが、なんとわしと同姓だ。舅毒殺の罪は赦されることのない十悪の一つだ。わしと同姓の者にも法を畏れぬ輩がいるとは。これはもう結審した書類だから、見るのは止めておこう。この書類は一番下に回して、別の書類を読むとしよう。

夜中に関係書類に目を通そうとした竇天章が最初に手に取ったのは竇娥関係の書類である。しかし、彼はその書類を後回しにしてしまう。この後、竇娥の幽霊が出てきて、その書類を再び一番上に戻す。これが三度繰り返される。こうした停頓の後で、二人の対面がなされ、事件が解決に向けて実質的に動き出すのである。

三

「神奴児」には他作品に共通してみられる新官登場直後の〈停頓の場〉は存在しない。新官登場から事件の解決の間に停頓が有るとすれば、以下の場面である。

「(正末)云」你看這李阿陳口内詞因、與這状子上不同。其中必然暗昧着。老夫怎生下断。中間但得一個干證的來、可也好也。

「何正上見正末跪科云」喏、小的是何正。

「正末云」你是何正。這椿事怎來、你説。

「何正云」小的姓何名正。是衙門中祗候人。我則道大人喚何正哩。

「正末云」你看、老夫波。他是衙門中一個祗候人。老夫年紀高大、耳背了。既然不干你事、你去。
「何正下」「做見李德義覷科云」我那裏見這廝來。哦、你是那李二員外。
「何正做打科云」快招快招。
「正末云」何正做甚麼。將李德義這般打也。
「何正云」大人斷事、小的每是祗候人、官不威、牙爪威。
「正末云」你看、這廝胡説、下廳去。
「（正末）せりふ」なんと、この李阿陳の口から出た申し立ては供述書にかかれているものと違っている。ここにははっきりしない点がある。わしはどう判決を下したら良いのやら。何か証拠（証人）がありさえすれば良いのだが。
「何正登場、正末に面会し跪くしぐさ、せりふ」はい、私は何正にございます。
「正末せりふ」お前は何正だな。こたびの事件は何故起きた。申してみよ。
「何正せりふ」私は何正にございます。役所の小者にございます。府尹殿が何正をお呼びになりましたので。
「正末せりふ」なんと、老人だな。こやつは役所の小者じゃ。年をとって耳が遠くなっておる。お前には関係のないことだから引っ込みなさい。
「何正退場」「李徳義に会い、じっと覗き見るしぐさ、せりふ」わしはどこかでこいつに会った気がする。あっ、おまえはあの李二旦那だな。
「何正殴るしぐさ、せりふ」白状しろ、白状しろ。
「正末せりふ」何正どうして李徳義をそんなに殴るのだ。
「何正せりふ」府尹殿が裁きをなさり、わたくし目は手下の小者。役人は怖くないが、手下は怖い。
「正末せりふ」なんと、何正のやつは、本当に無礼じゃ。

正末包拯が言った「干證（証拠、証人）」という言葉を自分の名前と聞き間違えて「何正」が登場し、二人の間で滑稽なやりとりがなされる場面である。何正は李徳義に殴りかかる。何正は、李徳義が被害者神奴児を連れているのを目撃しており、まさに「証人」であった。停頓に見えたものが実は事件解決の鍵に転化するのである。

この場面を二の〈停頓の場〉と区別し〈停頓＝事件解決の鍵の場〉と呼ぶことにする。この〈停頓＝事件

解決の鍵の場〉は他作品にも見ることができる。

「勘頭巾」では、牢屋で被告が証拠の頭巾の在処を出鱈目に供述するのを聞いていた農夫を取り調べる場面がこれに当たる。農夫の答えは要領を得ず、取り調べは一向に進まない。取り調べに当たる正末張鼎とのやりとりは滑稽味を帯びたものになっている。張鼎がたまたま口にした「焼餅」という言葉によって、真犯人から焼餅をもらっていた農夫の記憶が呼び起こされ、事件は解決に向かう。

「魔合羅」では、被害者が被告への伝言を頼んだ魔合羅売りを取り調べる場面がこれに当たる。正末張鼎の「実訴（ありのまま申せ）」という言葉を「実塑（ありのまま形づくれ）」と聞き違え、魔合羅売りは人形の形状を申し述べる。このやりとりも滑稽味を帯びたものになっている。この後、魔合羅売りは、真犯人に道を尋ねたことを思い出し、事件は解決に向かう。

これらの場面に共通するのは、次の三点である。

一、再審理に当たる役人による事件の鍵を握る人物の取り調べである。

二、鍵を握る人物の記憶の喚起を機に事件は一気に解決に向かう。

三、役人と取り調べを受ける人物の間のやりとりが滑稽味を帯びている。

この場面が前稿で見た院本の挿演である〈冤罪の場〉同様滑稽なやりとりを通して新しい事態が出現していることに注意を払う必要がある。(注七)

〈冤罪の場〉では、滑稽なやりとりの中で、被告が無実の罪での自供に追い込まれるのに対し、この場面では、同じく滑稽なやりとりの中で、被告の無実を明らかにする事実が示されていく。

この場面と二の〈停頓の場〉とは、それぞれの場面の持つ意味が異なっている。

〈停頓の場〉は、〈冤罪の場〉の再現であり、繰り返しである。新官登場により高まった事件解決への期待は、この場面により突き放される。この場面により〈舞台の上の世界の〉現実についての再確認がなされるのである。

これに対し〈停頓＝事件解決の鍵の場〉は事件解決へ向けての実質的な転換点である。〈冤罪の場〉は明から暗への転換であり、滑稽味を帯びた会話の連続の先にその頂点「自白」が用意されていた。一方〈停頓＝事件解決の鍵の場〉は暗から明への転換であり、やはり滑稽味を帯びた会話の連続の先にその頂点「記憶の喚起」が用意されている。この二つの場面は反転し

た形で対応している。

この逆転の後、事件は解決に向けて一気に進んでいく。

おわりに

以上、本稿では新官登場の場面とその後に続く停頓の場面の類型化について論じた。新官の形象の類型化、〈冤罪の場〉の繰り返しである〈停頓の場〉及び〈冤罪の場〉の逆転である〈停頓　事件解決の鍵の場〉について述べた。

注一　本稿は「元曲公案劇の構成―事件・人物関係・配役―」（『福井大学国語国文学』三十　一九九一）・「元曲公案劇の構成―冤罪への手続き―」（『福井大学教育学部紀要　人文科学（国語学・国文学・中国学編）』四十　一九九一）の続編として書かれたものである。

注二　本文の引用等は④「緋衣夢」、⑤「勘金環」が脈望館鈔本による以外は、特に注記のない限り元曲選本による。

注三　元曲では正末は一般に上場詩を詠まない。「神奴児」でも登場するとすぐに自己紹介になる。他作品で上場詩により語られていた内容は、自己紹介のせりふに続く「唱」のなかで表現されている。また、「勘頭巾」「魔合羅」で実質的な事件解決役となる正末張鼎も上場詩を詠まない。

注四　張林のせりふ。

注五　李老児のせりふ。「緋衣夢」には「勢剣金牌」「先斬後奏」の記述が無い。

注六　「魔合羅」では被告が「天那、誰人與我做主也呵。」と言って退場する。

注七　「元曲公案劇の構成―冤罪への手続き―」（前出）参照。